

2017 年度 入学試験問題

国 語

(第 2 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入しなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

① 次の文章は、「トウモロコシの七ふしぎ」について述べられたものの一節です。㊦・㊧・㊨・㊩には、それぞれ『ハイブリッド・コーン』とは何か？、「どうして、アルコールができるの？」、「なぜ、トウモロコシがダイズに勝つのか？」というタイトルがつけられています。これらを読んで、後の問いに答えなさい。なお、問題の都合上、本文を省略した部分があります。

㊦ 第二次世界大戦前後に、アメリカで、トウモロコシの栽培に、「ハイブリッド」という品種が利用されはじめました。トウモロコシは、英語で「コーン」なので、この品種は「ハイブリッド・コーン」とよばれます。これによって、一九三三年から三〇年間に、同じ面積当たりのトウモロコシの収穫量は約二倍に増加しました。

同じ面積当たりで約二倍という収穫量の増加は、すごいです。「ハイブリッド」というのは、「いたい、何なのか」とか、「いつたい、どのような栽培法が行われたのか」という「ふしぎ」が生まれます。

収穫量が三倍になったのは、その時代に良質な肥料や農薬が開発され、栽培の技術が向上したことなどがあわさって達成されたものです。しかし、その収穫量の増加の約六〇パーセントは、「ハイブリッド」の品種を利用したおかげと評価されています。

素性のはつきりした品種や系統と、それとは異なるけれども、やっぱり素性のきちんとした品種や系統を両親として子どもをつくると、雑種になったタネができます。これが、「ハイブリッド」とよばれる品種です。ハイブリッドというのは、「雑種」や「コンセイ^a」を意味する言葉です。ですから、ガソリンエンジンと電動モーターで走る自動車は、「ハイブリッド・カー」といわれます。

ハイブリッド品種のタネをまくと、「両親の品種からは想像できなかった、すばらしい性質を現することがあります。その性質とは、成長が早かったり、植物のからだや果実が大きかったり、病気や環境に対する抵抗性が強かったり、おいしい実を多くつけるなどです。ハイブリッド品種が両親のいずれよりもすばらしい性質を発現することは、「雑種強勢」といわれます。英語では、「ヘテロシス」とよばれます。

① 「トンビがタカを生む」という言葉があります。トンビもタカもタカ科の鳥類です。しかし、生物学的に、トンビがほんとうにタカを生むことはありません。トウモロコシもイネもイネ科の植物ですが、トウモロコシの株におコメが実ることはありません。ところが、植物の世界では、ことわざの意味通り、子どもが両親のどちらよりもすばらしい性質を発現する現象がおこることがあるのです。

この性質を栽培植物に利用すれば、私たちはその恩恵を受けることができます。そのため、多くの野菜でハイブリッド品種が開発されてきました。優秀な性質をもつハイブリッド品種を開

発すれば、その品種はよく売れるので、企業は利益を得ることができます。

ですから、企業にとってはやりがいのある仕事なのです。その結果、多くの企業で、ハイブリッド品種が積極的に開発され、多くの栽培植物で、すばらしい性質を発現するハイブリッド品種がつくられてきました。

素性のはっきりした品種のトウモロコシと、それとは異なるけれども、やっぱり素性のきちんとした品種のトウモロコシを交配すると、「ハイブリッド・コーン」が生まれます。栽培植物のハイブリッド品種の中では、トウモロコシが最初に実用化されました。

その理由は、この植物が主要な穀物であることに加えて、ハイブリッド品種がつくりやすいからです。トウモロコシは、一本の植物に雄花と雌花を別々に咲かせます。雄花は、株の先端に咲きます。そのため、花が咲くまでに雄花を刈り取るのがヨウイです。

たとえば、黄色い粒をつくる品種と、白色の粒をつくる品種を交配して、ハイブリッド品種のタネをつくる場合を考えましょう。トウモロコシ畑に何列かの畝をつくり、一つの畝に、黄色い粒をつくる品種を植えます。

隣の畝には、白色の粒をつくる品種を植えます。その隣の畝には、また、黄色い粒をつくる品種を植えます。その隣の畝には、また、白色の粒をつくる品種を植えます。こうして、トウモロコシ畑の中で、黄色い粒をつくる品種と、白色の粒をつくる品種を、畝を交互にして栽培します。

そして、花が咲くころになると、黄色い粒をつくる品種の畝に栽培されている株の先端をすべて切り落とします。すると、黄色い粒をつくる品種の雄花はすべて切り落とされるため、黄色い粒をつくる品種の花粉は、このトウモロコシ畑に飛びません。そのため、この畑には、切り落とされなかった白色の粒をつくる品種の花粉だけが飛びます。

雄花を切り落とされた黄色い粒をつくる品種の株には、雌花が咲きます。ですから、実がなります。そして、実の父親は、すべて、切り落とされた白色の粒をつくる品種の花粉です。つまり、黄色い粒をつくる品種を母親とし、白色の粒をつくる品種を父親とするハイブリッドなのです。

一方、白色の粒をつくる品種が植えられていた畝にできる実は、ハイブリッドではありません。白色の粒をつくる品種の株のメシベに、白色の粒をつくる品種の花粉がついてきた実だからです。

トウモロコシの場合には、花粉が出るまでに雄花を刈り取れば、母親としたい品種や系統の株の雌花に、父親としたい品種や系統の花粉を思い通りに受粉させることができます。このようにして、ハイブリッドのタネがヨウイにつくられます。

Ⅳ 「トウモロコシからアルコールを取り出し、ガソリンに混ぜて燃料として使う」という時代になっていきます。^③「今まで食糧であったトウモロコシから、燃料として使うエタノールをつくりだす」という「ふしぎ」です。これは、唐突な印象があるかもしれませんが、もしそうなら、ウイ

キーを思い出して下さい。

ウイスキーはコムギやオオムギが原料のこともありますが、トウモロコシからも、おいしいウイスキーがつくられます。ウイスキーにはアルコールが含まれています。すなわち、トウモロコシからアルコールをつくりだすことは昔から行われていたのです。ですから、トウモロコシからアルコールの一種であるエタノールをつくりだすというのは、そんなに唐突なハッソウではありません。

大気の中には、温暖化の原因となる二酸化炭素が含まれます。この濃度の上昇を食い止めるものとして、「バイオ燃料」が注目されています。石炭、石油などが「化石燃料」とよばれるのに対し、トウモロコシやサトウキビなどからつくりだされるエタノール、ダイズやナタネなどから得られる植物油などは、「バイオ燃料」とよべれます。「バイオ」は、「生物」という意味です。

バイオ燃料が燃焼して排出される二酸化炭素は、これらの植物が栽培される途上で、光合成によつて、植物のからだに取り込まれたものです。そのため、バイオエタノールや、ダイズ油、ナタネ油などを燃焼させて二酸化炭素を排出しても、大気との二酸化炭素のやりとりはプラスマイナスゼロとなり、大気中の二酸化炭素の濃度は上昇しません。ですから、バイオ燃料は「環境にやさしい燃料」といわれます。

近年、バイオエタノールが、ガソリンの代替としてにわかに脚光を浴びはじめています。早くから開発に取り組んでいたブラジルに続いて、アメリカでもバイオエタノールを混ぜたガソリンが販売されています。

世界的な環境問題の中で、二酸化炭素の排出量の削減が目標となっています。そのため、今後、バイオエタノールの生産増加がますます見込まれます。ガソリンに混ぜずに、エタノールだけで走行できる自動車の開発も行われています。トウモロコシは、そのような「フウチョウ」の中で、もつとも期待される植物なのです。

Ⅳ ダイズは、ダイズ畑で育ちます。トウモロコシは、トウモロコシ畑で育ちます。ダイズは東アジアが原産地で、トウモロコシはアメリカ大陸の熱帯地方の出身です。どちらも暑い地方の出身ですが、自然の中では、^④この二つの植物が戦うことはありません。一方、密閉したガラス容器の中で、人為的に戦わせてみる実験があります。

ダイズが育つ鉢植えとトウモロコシが育つ鉢植えを、いっしょに、密閉されたガラス容器の中に入れます。外から十分な強さの光で、一日二四時間、この容器を照らしつけます。鉢植えの植物には、十分な養分と水を与え、温度も生育に適するように調節します。さて、どちらが生き残るでしょうか。

数日が経過すると、ダイズは枯れ死に、トウモロコシは成長を続けています。この結果を「偶然だろう」と思う人がいるかもしれません。しかし、この実験は、何度やっても、「ダイズは枯れ死

に、トウモロコシは成長を続けている」という同じ結果になります。つまり、トウモロコシがダイズに勝つのです。

「なぜ、トウモロコシがダイズに勝つのか」という「ふしぎ」が生まれます。そして、「ダイズとトウモロコシで、どのような性質が異なっているのか」という疑問が浮かびます。ここで紹介した実験は、ダイズとトウモロコシのそれぞれがもつ、ある性質の違いをはつきりと示すために行われるものなのです。

⑤ 「ダイズは、《 》、枯れ死ぬのだろう」と思う人があるかもしれません。その可能性を調べるのはヨウイです。実験に用いたのと同じダイズの鉢植えを、密閉されたガラス容器の中に入れて、光を照らしつづけて育てます。十分な養分と水を与え、適切な温度に保って、十分な強さの光を照射しつづけます。

すると、鉢植えのダイズは、よく成長します。密閉された容器に入れなければ、ダイズは夜の暗闇がなくても育つのです。ですから、実験中に夜の暗闇が与えられないために、ダイズが枯れ死ぬではありません。密閉されたガラス容器の中に、トウモロコシといっしょにしていることが、ダイズが枯れ死ぬ原因なのです。

では、なぜ、ダイズは枯れ死に、トウモロコシは成長を続けるのでしょうか。密閉されたガラス容器の中で、光を当てつづけられた二種類の植物は、光合成を続けます。ダイズもトウモロコシも、光合成のために、空気中の二酸化炭素を吸収します。

容器は密閉されていますから、ダイズとトウモロコシが二酸化炭素を吸いつづけると、容器の中の二酸化炭素はどんどん減少します。ついには、その濃度が下がりすぎ、両方の植物が二酸化炭素を吸収しにくくなります。

二酸化炭素がどんどん減ってくると、この現象がおこるのです。すなわち、光合成の量が減ります。植物も私たちと同じように、呼吸をしています。光合成は、ガスの出入りが呼吸とは逆です。ですから、光合成が活発に行われている間は、呼吸による二酸化炭素の放出はありません。

しかし、光合成に必要な二酸化炭素が吸収できなくなると、呼吸により放出される二酸化炭素の量が、光合成により吸収される二酸化炭素の量を上まわります。その結果、密閉されたガラス容器の中の植物から二酸化炭素が放出されはじめます。

容器の中で、二酸化炭素の濃度がどんどん下がってくると、ダイズは光合成の量が減り、呼吸の量が光合成を上まわります。そのため、ダイズは二酸化炭素を放出します。その二酸化炭素を、トウモロコシが取り込みます。トウモロコシは光合成ができ、ダイズは光合成ができずに弱ってしまうのです。だから、トウモロコシがダイズに勝つのです。

「『なぜ、二酸化炭素の濃度がどんどん下がってくると、ダイズは光合成の量が減り、呼吸の量が光合成を上まわる』と、説明するのか。トウモロコシだって、同じではないか」という疑問が当然生まれます。トウモロコシも、容器内の二酸化炭素の量がどんどん減ってくると、光合成の

量が減り、呼吸の量が光合成を上まわるはずで

す。ところが、トウモロコシは、ダイズと比べて、。その二酸化炭素を、トウモロコシが光合成に利用します。そのため、ダイズは枯れ死に、トウモロコシは生き残るので

す。

(田中修『植物はすごい 七不思議篇』より)

問1 — 線 a ~ d のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 — 線①「トンビがタカを生む」について、このことばと反対の意味にあたるものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 能あるタカは爪を隠す
- 2 瓜のつるになすびはならぬ
- 3 梅檀は双葉より芳し
- 4 ヒョウタンから駒

問3 — 線②「恩恵を受けることができます」とありますが、この「恩恵」を具体的に述べている一文を文中からぬき出し、はじめとおわりの五字を答えなさい。

問4 — 線③「今まで食糧であったトウモロコシから、燃料として使うエタノールをつくりだす」ということが、行われているのはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「ハイブリッド・コーン」が開発されたことによって、エタノールをつくるための原料であるトウモロコシが安価で手に入るようになったから。
- 2 石炭・石油などの「化学燃料」が限りある資源であるのに対して、トウモロコシからつくられる「バイオ燃料」は無限にうみだされるから。
- 3 科学技術の発達によって、これまでは食糧としてしか利用できなかったトウモロコシの、新たな利用価値を引き出すことが可能となったから。
- 4 世界的に問題となっている温暖化の抑制に対して、トウモロコシからつくられるエタノールは大きな効果を持つものとして期待されるから。

問5 ——線④「この二つの植物が戦うことはありません」とありますが、これはどういうことを表していますか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 ダイズとトウモロコシはどちらも暑い地域で栽培されるが、それぞれ栽培される時期が異なるため、成長のうえで対立するような事態は起きないということ。
- 2 ダイズとトウモロコシは原産地が異なっており、他の地域や国に伝播していく過程が異なるため、どちらか一方だけが急激に広まることはないということ。
- 3 ダイズとトウモロコシはともに暑い環境を好むが、意図的に特定の条件下におかないかぎり、一方がもう一方の成長を妨げるようなことはないということ。
- 4 ダイズとトウモロコシはどちらも暑さを好むが、トウモロコシは環境に対して柔軟に適応していくことが可能なので、ダイズとの間に対立はないということ。

問6 ——線⑤「ダイズは、《 》、枯れ死ぬのだろう」について、《 》に入れるのに最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 夜の暗闇があるので
- 2 光と水がなければ
- 3 夜の暗闇が長いと
- 4 あたたくくなければ
- 5 夜の暗闇がなければ

問7 本文に關しての説明A～Dについて、その内容が正しいものを○、正しくないものを×としたとき、組み合わせとしてふさわしいものを後から一つ選び、番号で答えなさい。

A 第二次世界大戦の前後に、アメリカでトウモロコシの生産量が著しく増加した最も大きな理由は、栽培技術が向上した点にある。

B 最初のハイブリッド品種としてトウモロコシが選ばれたのは、環境問題に対処していくという観点からすれば当然のことである。

C トウモロコシが光合成をするために必要なものは、十分な養分と水分と日光、適度な温度、さらには二酸化炭素だと考えられる。

D 通常、ダイズは光合成で消費する二酸化炭素の量よりも呼吸で排出する二酸化炭素の量の方がずっと多いということが言える。

1	A // ×	B // ○	C // ×	D // ×
2	A // ○	B // ○	C // ×	D // ×
3	A // ×	B // ×	C // ×	D // ○
4	A // ×	B // ×	C // ○	D // ×
5	A // ○	B // ×	C // ○	D // ×
6	A // ×	B // ×	C // ○	D // ○
7	A // ○	B // ○	C // ×	D // ○
8	A // ×	B // ○	C // ○	D // ○

問8 空らん には、トウモロコシとダイズの性質の違いと、そこから、な

ぜダイズが枯れ死に、トウモロコシが生き残るかの理由が述べられています。この部分に入るのにふさわしい内容となるよう、五十字以上七十字以内の文章を考えなさい。

(問題は次のページに続く)

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

世田谷の高級マンションに住む小学五年生の「千恵」は、「千恵」の私立中学校への進学をめぐり関係がぎくしゃくしている両親のことを気にかけていた。深川に住む祖父「エンジ」のもとで夏の間過ごすよう「お父さん」からいきなり言われた「千恵」は、とまどいを感じながらも、「エンジ」と二人きりの夏を過ごすのであった。「千恵」が深川での生活に慣れ、楽しさを感じてきたある日のこと、「お父さん」が突然「千恵」を迎えにきた。以下の文章は、それに続く場面である。

「わたし、ここにいます」

言葉を放つてから、千恵は自分でもびっくりした。

「ずっとここにいます」

「どうして」

お父さんも意外だったみたいで、Aをぼかんと開けている。

千恵は感情のまま訴えた。

「わたしもお父さんが嫌いだよ。あんな家、戻りたくもないよ。見栄を張って、高いマンションなんか買っちゃってさ。お金を返すのが大変なんでしょう。前にお父さんとお母さんが話してるの聞いたもん。それで夜遅くまで働いて、お母さんは近所の人とうまくやるのに高いランチとか食べに行ったりして、そんなのみつともないよ。ねえ、お父さんはそれで楽しいの。せっかく買った家なのに、日曜しかゆつくりできないじゃない。わたしは楽しくないよ。昔のお父さんと一緒にだよ。早くあそこを出たいよ。わたしのことを勝手に決めようとしてるお父さんもお母さんも大嫌いだよ」

ふう——。ふう——。

「わたし、ここがいい。これから、ここで暮らす。友達もできたんだよ。大縄跳びだって、二重跳びだって、教えてもらえる。お父さんやお母さんというより、ずっと楽しいよ。あのね、橋を渡っていると、風が吹いてくるの。水の匂いがあるし、たまに海の匂いもある。橋から叫ぶと、向こうの橋にいる友達に声が届くんだよ。魚が泳いでるのだけに見える。世田谷の家に戻ったって、エレベーターで上がったたり下がったりするだけじゃない。わたしはここがいい。エンジと一緒に住む」

ギイギイと音が聞こえるのには、なんとなく気付いていた。誰かが階段を上ってきたんだ。お父さんもそつちを気にする素振りを見せた。けど今は、ふたりとも、それどころじゃなかった。直後、轟音が家中に響いた。なにかが階段を転げ落ちたのだ。

なにかかって——？

先に動いたのはお父さんだった。ものすごく早かった。襖を開け、階段を覗き込んだ。「オヤジ！」

叫んだ。

続いて千恵が覗き込むと、エンジが階段の下にうずくまっていた。

千恵も叫んだ。

「エンジ！ ねえ！ エンジ！」

いろいろあった。全部は覚えてられなかった。救急車がやって来た。うわんうわんとサイレンを鳴らしてた。近所の人が集まってきた。もちろんシゲさんも来た。前から救急車に乗ってみたいと思ってたけど、いざ乗って見たら、中を観察する余裕なんかなかった。

「骨に異常はないですね」

レントゲンを見ながら、お医者さんは言った。お父さんは息を吐いた。本当に、本当に、たくさん息だった。

「じゃあ大丈夫なんですか」

「大きな怪我ではないのは確かです。ただ、お年がお年ですから、簡単ではないかもしれませんが。お父さまはおひとりでお住まいですか」

「ええ、わたしは離れて住んでまして」

お医者さんとお父さんがそんな話をしてる最中、後ろのベッドに寝転がっていたエンジが「B」招きした。迷いつつ、千恵はそちらに向かった。

「道具箱を片付けておいてくれ」

妙なことを言われた。

「え……」

「あれがあると、ばれちゃうかもしれないからな。階段の下に転がってる」

「道具箱、なにに使ったの」

「投げ落とした」

「なんで」

「息子と孫娘がああだこうだ言ってるのは好きじゃねえ。本当のことをいうと、俺はなんともねえんだ」

エンジは、お父さんとお医者さんの姿を横目で確認してから、痛い痛いと言っていた右膝を曲げ、足を浮かせてみせた。足は軽々と動いた。そしてエンジは笑った。してやったりという

「C」だった。

ようやく、からくり気付いた。

階段から落ちたのはエンジじゃなかったんだ。階段を何段か上ったあと、道具箱を放り投げた。それから慌あわててエンジは階段の下まで行って、うずくまった。よくもまあ、そこまで頭がまわったものだ。呆あまれつつ、感心した。少しだけ千恵も笑ってしまった。^①なぜか泣くような顔になってしまったけど。エンジは、口に人差し指を当てた。黙だまってるってことだ。千恵は頑がん張ばって、笑い声を抑おさえた。

やがてお母さんがやってきた。家族全員が集まった。まるでエンジが今にも死ぬみたいだった。エンジはそんな厳げん肅しゆくな雰ふん圍い気きの中、全員を呼び寄せた。

「俺おれになにかあったら、あの家は売ってくれ」

「怖こわいこと言わないでください」

お母さんの顔は真っ青で、声はうわずっていた。

そんなの初めて見た。びっくりした。

「あそこは二十七坪つばある。狭せまいが、角地だから、そこそこ値がつくだろう。千恵の学費くらいは出るはずだ。千恵の好きなどころに行かせてやれ」

エンジ、と千恵は叫こびたかった。学費なんてどうでもいいよ。あんまり会えないし、仲がいいのかどうかわからないけど、エンジがこの町ですつと生きていてくれる方がいいよ。だって、ここはエンジの町なんだよ。エンジが死んだおかげで私立中学校に行けるんなら、わたしは行かなくていいよ。どんなに強く思っても、言葉は出てこなかった。悔くしくて、千恵は唇くちびるを嚙かんだ。そのうち鉄錆てつさび臭くさい味が広がった。様子に気付いたのはお母さんだった。

「どうしたの、千恵。唇を切ってるわ」

「なんでもない」

「剥むけかかった唇の皮を、むりやり取ったんでしょ」

「うん」

違ちがうけど、そういうことにした。

「気を付けないと。女の子なんだから」

「うん」

「ほら、ハンカチで血を拭ふいて」

「どうでもいい！」

大声を出したのは、お父さんだった。

「血なんかどうでもいい！」

「だけど——」

「血なんか放っておけばとまる！ 今はそんなことを話すときじゃないだろう！」

「でも——」

「うるさい！ 黙だまってる！」

お父さんがそういう乱暴な言葉を使うのは初めて聞いた。お母さんはびっくりしていた。千恵

も同じだった。お父さんは明らかに怒っていた。お母さんと喧嘩したときは比べられないくらいだった。

オヤジ、とお父さんは言った。

「下らないことを気にすんな。うちの家計が面倒なのは確かだけど、俺がなんとかするんだよ。あんただって、そんな覚悟で俺やオフクロを養ってきたんだろうが。千恵のことも、家のことも、俺がなんとかする。あれは俺の家なんだ」

エンジは「D」を丸くしていたけど、そのうち真面目な顔になった。

「できるのか」

「当たり前だ。頑張るさ」

そうか、とエンジは呟いた。いつもの、団扇を振っているときの調子だった。

「変なことを言っつて悪かったな」

「大丈夫ですか。歩けますか」

氣遣ってくれるお医者さんに悪いなと思った。立ち上がったエンジは、実にわざとらしく膝を押さえたけど、それはすべて演技なのだ。

「まあ、なんとか。ただ、一カ月ばかり、誰かがいてくれると、助かるには助かりますな。ちょっとしたことを頼める相手が。いや大人じゃなくていいんだ。そんなたいそうなことは頼まないんでね」

結局、千恵が付きそうになった。エンジの具合がよくなるまでという話だった。そう、一カ月ばかり。ちょうど夏休みが終わるまでのあいだ。

「うまくやっただろう」

家に帰ると、エンジは笑った。

千恵も笑った。

「完璧だよ」

買ったばかりのチェリオを、ふたりで飲んだ。

② とても甘かった。

一カ月の深川生活は楽しかった。すべての川を覚えた。橋を覚えた。最短距離で走れるようになった。二重跳びはマスターした。みんなの大縄跳びにも、入れてと言えるようになった。勉強はまったくしなかった。週に二回か三回、お母さんからエンジの様子をうかがう電話がかかってきた。

「ちよつと膝が痛いみたい」

「起き上がるのが大変そうかな」

「だいぶよくなってきたよ」

千恵は嘘ばかり吐いた。

「やっぱりお母さんが行くかしら」

「大丈夫だよ。平気だよ。それにお母さんとエンジが気を遣うよ」

「ああ、確かに。千恵もそういうことがわかるようになったのね」

お母さんは黙り込んだ。いくらか沈黙が続いた。千恵は心臓がどきどきした。やがてお母さんが言った。

③「塾を続けるかどうかは千恵が決めなさい。お母さん、それでいいから」

しばらくして、エンジは板塀を直した。あの道具箱から、ノコギリやらゲンノウやらを取り出し、木を切ったり、釘を打ったりした。あつという間に、ぼろぼろだった板塀は、立派になった。

「これでまあ、あと十年は平気だ」

エンジは得意気に笑った。いつかエンジは言っていた。塀より自分の方が先にいつてしまうから直さないのだと。

なのに、どうして直す気になったんだろう。

やがて夏の終わりがやってきた。千恵が世田谷に帰る日だ。エンジの膝は治った——ということになっていった。

電話してみたところ、美紀ちゃんは旅行に行っていて会えなかった。

千恵は例の壁画のところに向かい、壁に描かれた切れ長の目の美紀ちゃんに言った。

「さよなら」

またね、という言葉を足すかどうか迷ったけど口にできなかった。なぜだろう。

「さて行くか」

そう言ったエンジは、いつものダボシャツとステテコではなく、透かしの入った服と、濃紺のズボンをはいていた。なんと足もとは黒の革靴だ。エンジがそんな格好をしているのは、初めて見た。千恵はびっくりしてしまった。

「え、なんで」

千恵は尋ねたけど、見当違いの言葉が返ってきた。

いや、あるいは、ばつちりだったのか。

「永代橋を渡りたいんだろう」

「あ、うん」

「一回くらい渡っておいても損はないな。ありゃ立派なもんだ。橋の向こうも、どうせ同じ地下鉄だし」

「エンジも渡るの」

「そうさな」

エンジは、しばらくのあいだ、考える振りをした。

その気持ちは明らかなのだが。

「まあ渡ろうか」

「向こう岸に行ったことあるの」

「そりゃあるさ」

ぐずぐずしている千恵を促したのは、エンジの方だった。

「忘れ物はないか」

「うん」

「じゃあ行こう」

エンジはいつもの散歩道を進んだ。永代通りを真っ直ぐ歩いた方が早いのに。裏道を行き、倉庫の角を曲がった。^④自然と千恵の足取りは遅くなった。少し歩くごとに、エンジは待っていてくれた。

「いつでも来られる」

エンジは言った。

「シゲが調べてくれたんだ」

「え、なにを」

「清澄白河駅なら一本だ」

千恵の住む世田谷と、エンジの住む深川は、直通電車がある。地上線と地下鉄だけど、繋がっているのだ。

「そうだね」

^⑤なぜ、そのとき、胸が痛くなったんだろうか。

「すぐだよね」

やがて永代橋に着いた。太陽はビルの向こうに沈んで、その輪郭だけが光っていた。

橋の手前で、エンジは立ち止まった。

「行こうか」

「うん」

「渡るぞ」

なかなか歩き出さない。しかし最初の一步を踏み出すと、あとはスムーズだった。いつしか、千恵はエンジと手を繋いでいた。エンジの手は大きく、ごつごつしていた。硬かった。

「手、硬い」

そう言うと、エンジは笑った。誇らしげだった。

「職人だからな」

空いている右手で、千恵は、永代橋の欄干に触ってみた。たくさんのでこぼこがあつて——リベットというのだとエンジが教えてくれた——それに触れるたび、頭ではなく、手のひらが膨らみを記憶していった。この感触は、ずっと残る。そう思った。頭で覚えたことは忘れてしまうかもしれないけど、体で覚えたことは決して忘れないだろう。

「気が向いたら来い」

「うん」

「気が向かなかったら来なくていい」

「うん」

エンジは少し、躊躇った。言葉が残っているのがわかった。

迷った末、千恵は尋ねた。

「なに」

エンジはしばらく答えず、ただ橋を渡った。永代橋は、ぐうんと天に向かって延びていた。とてもきれいだと思った。どこまでもどこまでも登っていけそうだ。向こう岸のビルは、ちらほらと光を灯しはじめていた。まるでキャンドルのようなだった。これから、わたしはあそこに行くのだ。

「俺はずっとここにいる」

エンジは言った。

千恵は頷いた。

「うん」

どうしたって他の言葉は出てこなかった。それでいいという気もした。エンジと手を繋いだまま、千恵は永代橋を渡った。

ビルがびかびか光っていた。

風が吹いた。

海の匂いがした。

千恵はエンジの手を、強く、強く、握りしめた。

(橋本紡「永代橋」より)

問1 空らん A D にあてはまる、体の部分を表す漢字一字をそれぞれ答えなさい。

問2 — 線①「なぜか泣くような顔になってしまったけど」とありますが、この時の「千恵」の心情の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「エンジ」のくだらない行動に振り回されてしまった自分を情けなく感じている。
- 2 「エンジ」が怪我をしていなかったことに安心し、張り詰めた気持ちが緩んでいる。
- 3 「エンジ」がお医者さんに迷惑をかけてしまったことに対し、申し訳なく思っている。
- 4 「エンジ」の演技にだまされて慌ててしまったことを恥ずかしく思っている。

問3 ——線②「とても甘かった」とありますが、この描写は「千恵」のどのような心情を表現していると考えられますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 家族をだますことに成功し、しばらくの間、通いたくない塾へ通わなくてもよくなったことへの喜びを表現している。

2 「エンジ」の周囲の人々が「エンジ」の演技に気づいていないことをほほえましく思っていることを表現している。

3 「お父さん」が来て以降、今までの慌ただしさから解放され、ようやく落ち着いて過ごせることへの安心感を表現している。

4 夏休みが終わるまで「エンジ」と二人で過ごすことが出来るようになったうれしさを表現している。

問4 ——線③「しばらくして、エンジは板塀を直した」とありますが、「エンジ」が板塀を直す気になったのはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 「千恵」の気持ちを思いやり、自身がこれから先も元気であるという姿を見せて安心させたかったから。

2 長い期間「千恵」と深川とともに暮らすうちに、忘れかけていた職人としての心意気を思い出したから。

3 自身の死期が近いことを感じ、それまで手付かずだった身の周りを整理整頓しようという気になったから。

4 「千恵」を見送るにあたって、板塀がぼろぼろのままでは格好が付かず、申し訳ないと思っただから。

問5 ——線④「自然と千恵の足取りは遅くなった」とありますが、このときの「千恵」の心情の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 「エンジ」に永代橋を渡らせることを申し訳なく思っている。

2 「エンジ」がわざと遠回りの道を歩くことに不信感を抱いている。

3 「エンジ」と過ごす時間を少しでも引き延ばしたいと思っている。

4 「エンジ」の歩く速度についていけず、疲れを感じている。

問6 ——線⑤「なぜ、そのとき、胸が痛くなったんだろうか」とありますが、「千恵」の「胸が痛くなった」のはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 電車を使えばいつでも来られるという「エンジ」の発言は、「エンジ」が「千恵」と早く別れたがっているように「千恵」に感じさせるものだったから。
- 2 電車を使えばいつでも来られるという「エンジ」の発言は、かえって「エンジ」との生活の終わりを、より「千恵」に実感させるものだったから。
- 3 電車を使えばいつでも来られるという「エンジ」の発言は、「千恵」が帰ることに対しての皮肉であると「千恵」に思わせるものだったから。
- 4 電車を使えばいつでも来られるという「エンジ」の発言は、世田谷と深川の物理的な距離を「千恵」にはじめて気づかせるものだったから。

問7 この作品における「永代橋」は何を象徴していますか。その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「永代橋」は、「エンジ」の世界と「千恵」の世界を一つのものとして結びつけるきずなである。
- 2 「永代橋」は、「エンジ」の強く深い愛情を「千恵」に対して伝える二人の心の架け橋^{はし}である。
- 3 「永代橋」は、「千恵」が「エンジ」の住む世界から離れて成長するために越^こえるべき境界である。
- 4 「永代橋」は、「千恵」がいつでも「エンジ」のもとに帰ることができる確かな道しるべである。

問8 文中で「エンジ」は階段から落ちて怪我したふりをしました。そして、自分の死後、家を売り「千恵」の学費にあてるように言いました。「エンジ」はこの一連の演技で「お父さん」の何を確認したかったのですか。十五字以内で答えなさい。

(問題は次のページに続く)

3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

夜のひまわり

喰くいつくような
昼間の暑さが
ようやくなだめられた夜半
ひまわりたちは
立ちつくしていた
さみしく色褪いろあせ
うな垂れて

なまぬるい夜のなかで
ひまわりは眠ねむれない

① こいしい者に
去られたいま
成熟の重さに
耐たえかねて

② 思い思いの向きに
わが身を持って余している
夏のおわりの
夜のひまわり

(ひろせ俊子『燕』より)

問1 この詩の文体と形式として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 口語定型詩
- 2 口語自由詩
- 3 口語散文詩
- 4 文語定型詩
- 5 文語自由詩
- 6 文語散文詩

問2 この詩の中で最も多く使われている表現技法を次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 直喩(ちよくゆ) (明喩)
- 2 倒置法(とうちほう)
- 3 擬人法(ぎじんほう)
- 4 対句
- 5 反復(はんぷく) (くり返し)

問3 線①「こいしい者」とありますが、詩の中では何を指しますか。一語で答えなさい。

問4 線②「わが身を持て余している」とありますが、具体的にはひまわりがどのような状態であることを表していますか。次のように説明したとき、空らんにあてはまることばをひらがな五字以内で考えて答えなさい。

ひまわりが 状態。

問5 この詩の説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 季節の移り変わりをひまわりの様子に見て取り、けだるい雰囲気(ふんいき)を、ことばのリズムを生かしながら表現している。
- 2 夏に出会った人との恋(こい)が続かず、恋に破れた心の傷をひまわりの様子に重ね、痛々しいことばで表現している。
- 3 自己の成長をひまわりの様子に重ね、これからも我慢強く生きていこうと決意し、力強い調子で表現している。
- 4 温暖化による環境問題(かんきょうもんだい)をひまわりの様子から感じ取り、おとろえてしまった都市の現実を、不気味に表現している。

4 次の各問いに答えなさい。

問1 次のA～Fの漢字の成り立ちとして最もふさわしいものを、後の1～4から一つ選び、それぞれ番号で答えなさい。

A 腹 B 鳴 C 耳 D 末 E 羽 F 創

1 象形〔物のかたちをそのままかたどった絵画的なもの。〕

例 山 ・ 川

2 指事〔物事の間接的関係、点や線などの記号によって表したもの。〕

例 二 ・ 上

3 会意〔二つ以上の文字を組み合わせて、別の新しい意味を表したもの。〕

例 「信」↑「人」＋「言」

4 形声〔意味を表す文字と音を表す文字を組み合わせたもの。〕

例 「江」↑「水」を表す「氵」＋音を表す「工」

問2 A「腹」・D「末」・F「創」について、それぞれの部首名をひらがなで答えなさい。